〔倭訓栞前編十四多〕たふる　倒をよめり、仆も僵も同じ、靈異記に、顛沛を訓ず、又躓をよめり、倭名抄に狂をよめるも、心の顛倒する義也、たふすは、彼よりいふ詞なり、倒る、所に土つかむといふ諺は、今昔物語にみえたり、今俗こけた所で火打石ともいへり、

〔日本書紀十四雄略〕十二年十月壬午、天皇命木工闘鷄御田、一本云、猪名部御田蓋誤也、始起樓閣、於是御田登樓疾走四方、有若飛行、時有伊勢采女、仰觀樓上、怪彼疾行、顛仆於庭、覆所擎饌、

〔今昔物語二十八〕信濃守藤原陳忠落入御坂語第卅八

今昔、信濃ノ守藤原ノ陳忠ト云フ人有ケリ、〇略中守僻事ナ不云ソ、汝等ヨ寶ノ山ニ入テ手ヲ空クシテ返タラム心地ゾスル、受領ハ倒ル所ニ土ヲ掴メトコソ云ヘト云ヘバ、〇略下

〔類聚名義抄五足〕蹭　又橙七贈反　フス　フシマロフ　蹬音鄧　蹭也　俗又登　フシマロフ

〔伊呂波字類抄末字辭〕跪　マロフ　辷　蹲　轉　樣　蹣已上同

〔書言字考節用集九言辭〕宛轉　跎同　辷同本朝俗字、音義未詳、　轉輾毛詩註、臥不安席之意、　跪同轉　蹉跎廣雅、失足貌、出文選、　蹣轉同　辷同

〔倭訓栞前編古九〕ころび　神代紀に嘖讓をよめり、万葉集に、自臥をころぶすとよめる意、ぶす反び、展臥の謂也、〇略中

ころぶ　展轉をいふ、ころばすは令轉の義、はす反ぶ也、辷は倭字也、應仁記に見えたり、

〔類聚名物考言語七〕ころぶ　自伏

今俗には轉躓をころぶといふには異なり、されどもその意は相同じ、ころぶとは自伏なり、ころはおのづからといへる古語にて、おのづからふすなり、萬葉卷二讃岐狹岑島、視石中死人、人麿の長歌の中に、浪音乃茂濱邊乎、敷妙乃枕爾爲而、荒床、自伏君之、家知者云々とあり、これその證なり、同卷これより上に、木瓶殯宮の長歌人麿にも、玉藻之如久、許呂臥者とあるも、うちふすさまをい

展轉